

松 山 大 学 論 集
第 32 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 2 0 年 12 月 発 行

評伝 入江奨先生の人と学問（その4）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 靖 弘

評伝 入江奨先生の人と学問（その4）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 埴 弘

目 次

はじめに

第一章 生誕から松山商科大学就任まで

（1923年6月～1951年3月）

第二章 松山商科大学教員時代

第1節 松山商科大学－教員時代

（1951年3月～1973年3月）

1) 1951（昭和26）年度

）

3) 1953（昭和28）年度（以上、その1、第32巻第2号）

4) 1954（昭和29）年度

）

13) 1963（昭和38）年度（以上、その2、第32巻第3号）

14) 1964（昭和39）年度

）

22) 1972（昭和47）年度（以上、その3、第32巻第4号）

第2節 経済学部部長・大学院経済学研究科長時代

（1973年4月～1984年3月）

1) 1973（昭和48）年度

2) 1974（昭和49）年度（以上、本号）

3) 1975（昭和50）年度（以下、次号）

）

11) 1983（昭和58）年度

第3節 再び教授に戻って（1984年4月～1989年3月）

第4節 再雇用期の入江先生（1989年4月～1994年3月）

第三章 退職後の入江先生（1994年4月～2005年4月）

おわりに

第2節 経済学部部長・大学院経済学研究科長時代

1) 1973(昭和48)年度

1973年4月1日、入江先生は経済学部長に就任した(1973年4月1日～1977年3月31日)。入江先生、このとき、49歳であった。学校法人の評議員を続けている。

学長は八木亀太郎(5年目)である。経済学研究科長は太田明二が引き続き務めた¹⁾

本年は創立50周年にあたる年であり、これを記念して八木亀太郎学長・理事長ら大学当局は、①新学部の設置、②新校舎建設、③中央記念館の建設(中央図書館、地域経済研究所等)、④学会の開催、⑤創立50周年記念論文集の刊行、⑥創立50周年記念式典などを決めた²⁾

経済学部長に就任した入江先生は『学園報』第22号に「新入生諸君とともに」と題した歓迎の辞を載せた。その大要は次の通りで、学生の主体的な研究活動を期待するもので、入江先生ならではの歓迎の辞であった。

「新入生諸君。入学おめでとう。とはいえ、諸君がこの言葉を聞いてどのように思うか。諸君の一人一人の胸の中をめぐり、その心理を想像すると、この言葉を容易に口にして打ち過ぎる訳にもいきません。なかなか複雑な心境になります。

時には幼稚園、小学校に進むときから、そして中学校に進む時にも、主として父兄の心を通し、それを反映しながら、かなりの人数の子供が、選別とエリート化の波浪に投げこまれ、その怒濤を心にきざみこまれながら育てられていることを、悲しくも知らされています。高等学校に、そして大学に進むときには、父兄だけでなく本人自身も、その渦中に自覚的に心身を投じ、その渦の中心をぐるぐる廻りながら、あえぎ苦しみ悩み、心に

1) 『六十年史(資料編)』126～131頁。

2) 『五十年史』360～369頁。なお、経済学史学会は前年に行なわれている。

大きな歪みと傷をつくるに至る、このような者が非常に多いと聞かされています。諸君は果たしてどうだったでしょうか。（中略）

私は、入学を素直に喜んでほしいとか、その喜びに陰があるのは困るとか、言おうとしているのでは、決してありません。そうではなくて、選別・エリート化の風潮のなかで、選ばれて入学して来た諸君を、選ばれたこと自体に対して、おめでとうと祝福するのか、それとも、他の何かに対して、他の理由で、おめでとうと祝福するのか。それを考えないではおれないというにすぎません。（中略）

大学は、単なる教育機関ではなく、研究機関であり、研究活動を訓練する場だと思えます。だからこそ、学園を支えるエネルギーとして学生が位置づけられうるのだと考えます。考え、意見をまとめ、討論し、創造していく。これが大学生活の基本と考えます。高校段階までと決定的に異なるのがこの点でしょう。

それは積極的活動であるために、予想以上の忍耐と執着力と主体性を必要とし、困難が待ち受けています。語学、数学、歴史、哲学など、様々な素養が必要であり、多くの文献資料を消化する力と活動が必要です。

諸君は、まずその方向に速かに心身を変化させていかねばならぬでしょう。それを援助するために、カリキュラムが組まれ、演習に重要な位置が与えられています。

同時に、主体的な研究活動の訓練という観点から、大巾に、自由がとりいれられてもいます。陥穽があることを知りながらです。この陥穽については、別の機会にふれましょう。ともかく、いまの学園がすべての面でうまくいっているとも、諸君を迎えるものが楽園であるとも、決して思っはいません。

けれども、私たちの誇りうる点は、諸君を仲間として迎え、共に、充実した、社会的責務に相応しい学園をつくっていかうとする情熱に燃え、日々、できるだけ努力をしている点だ、と考えています。

教室での、サークルの場での、諸君の意欲的活動を切望するとともに、教室での、家庭での、諸君と私たちとの堅固不拔な絆が、建設されることを、強く期待しています。』³⁾

入江先生学部長就任年次（1973年度）の行事日程を『学生便覧（昭和48年度）』より掲げておこう。

1973（昭和48）年度行事日程

行 事

入学式	4月9日(月)
ガイダンス・身体検査	4月10日(火)～4月12日(木)
一般授業	4月13日(金)～7月7日(土)
創立記念日	5月29日(火) 平常通り授業
集中講義	7月9日(月)～7月14日(土)
夏季休暇	7月16日(月)～8月25日(土)
集中講義	8月27日(月)～9月8日(土)
一般授業	9月10日(月)～9月22日(土)
前期試験	9月24日(月)～10月2日(火)
休 暇	10月3日(水)～10月6日(土)
一般授業	10月8日(月)～12月22日(土)
冬季休暇	12月24日(月)～1月5日(土)
一般授業	1月7日(月)～1月30日(水)
後期試験	2月1日(金)～2月13日(水)
入学試験日	2月17日(日)
卒業式	3月20日(水)

3) 入江奨「新入生諸君とともに」『学園報』第22号、1973年4月1日。

4月9日、午前10時より体育館において、入学式が挙行された。経済学部479名が入学した。経済学研究科修士課程は5名（芳野俊郎ら）が入学した。芳野俊郎（経済学部岩田ゼミ）は入江先生を指導教授とした。

また、入江学部長は、1969（昭和44）年度から実施されている現行カリキュラムの検討を開始している⁴⁾

入江先生が経済学部長に就任した時の経済学部の教授会メンバーは次の通りである（生年月日、学歴、赴任年月、年齢、担当科目）⁵⁾

学部長

入江 奨	1923年6月	大阪商大	1951年3月	49歳	経済学史
------	---------	------	---------	-----	------

教授

渡植彦太郎	1899年5月	東京高商	1971年4月	73歳	経済政策概論	特任
上田藤十郎	1899年11月	京都帝大	1972年4月	73歳	経済史概論	特任
大鳥居 蕃	1901年5月	東京商大	1925年6月	71歳	国際経済論, 国際金融論	特任
増岡 喜義	1903年12月	九州帝大	1929年5月	69歳	経済学, 財政学総論	再雇用
高村 晋	1907年11月	京都帝大	1949年4月	65歳	法学, 憲法	再雇用
国沢 信	1908年8月	神戸商業大	1972年4月	64歳	経済原論(二), 計量経済学	
太田 明二	1909年5月	神戸商業大	1933年6月	63歳	経済原論(-), 経済変動論	
伊藤 恒夫	1912年1月	京都帝大	1948年3月	61歳	教育学, 社会学	
小原 一雄	1913年10月	東京外大	1963年4月	59歳	中国語	
松木 武	1914年11月	京都帝大	1949年4月	58歳	経済学のための数学, 商業数学	

4) 入江奨「昭和五〇年度の経済学部」『温山会報』第18号、1975年8月。

5) 『学園報』第22号、1973年4月1日、等より。

松野 五郎	1917年10月	東京帝大	1963年4月	55歳	統計学, 統計学総論, 経済学のための数学
越智 武	1920年4月	日本体育会 体操学校	1963年4月	52歳	体育
伊達 功	1924年4月	京都帝大	1964年4月	48歳	社会科学概論, 社会思想史
稲生 晴	1925年3月	九大大学院 研究奨学生	1953年4月	48歳	経済原論(三), 経済学, 日本経済論
高橋 久弥	1931年1月	九大大学院	1962年4月	42歳	金融論
望月 清人	1932年3月	神大大学院	1956年4月	41歳	工業政策論, 社会政策総論
水地 宗明	1928年9月	京大大学院	1967年4月	44歳	哲学, 倫理学, 論理学
助教授					
渡部 孝	1931年7月	北ダゴダ院	1963年4月	41歳	英語
田辺 勝也	1932年2月	大阪市大 大学院	1966年4月	41歳	社会政策各論, 日本経済論
中原 成夫	1932年5月	上智大大学院	1967年4月	40歳	ドイツ語
宮崎 満	1936年1月	一橋大卒	1964年4月	37歳	交通論
比嘉 清松	1936年5月	神大大学院	1968年4月	36歳	西洋経済史
小松 聡	1938年4月	東京教育大 大学院	1966年10月	34歳	外国経済論, 日本経済論
増田 豊	1938年9月	国際基督教大 大学院	1967年4月	34歳	英語
岩田 裕	1938年11月	神大大学院	1965年4月	34歳	計画経済論, 経済政策概論
山口 卓志	1940年9月	神大大学院	1968年4月	32歳	財政学各論
五島 昌明	1940年10月	日本体育大	1970年4月	32歳	体育
岩橋 勝	1941年9月	大阪大大学院	1969年4月	31歳	日本経済史
講 師					
飛驒 知法	1942年4月	関西学院院	1969年4月	30歳	英語, 英米文学

森田 邦夫	1943年5月	中央大院	1971年4月	29歳	商法手形小切手
青野 勝広	1944年2月	神大大学院	1970年4月	29歳	産業構造論
岡本 詔治	1944年7月	大阪市大院	1971年4月	28歳	民法物権
マンクマン	1915年9月	英国	1961年4月	59歳	英会話

教授会メンバーの年齢をみると、大学院経済学研究科（修士課程）が設置されたこともあり（1972年度）、入江先生よりもかなり高い年齢の教授が12人いた。

本年度の入江先生の担当科目は、これまでと変わらず、基礎教育科目の経済学「マルクス経済学」（4単位）、一般演習（2単位）、専門科目の経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、そして短大の経済学I（2単位）であった。大学院では修士2年の森貞俊二と修士1年の芳野俊郎の2名を指導している。

マルクス経済学の教授要目は前年度とほぼ同様で、本年の主要参考書として、金子ハルオの『経済学（上）』（新日本出版社）を使用している。

経済学史の教授要目は「古典学派の生成、発展、転化の動向にメスを加えることによって、現代の経済学の在り方を考えていく。マルクス経済学の生成、発展、限界分析の形成・発展についてもふれていく」というもので、主要参考書は、入江先生も執筆している経済学史学会関西部会編『経済学史研究』（ミネルヴァ書房）および同編『近代経済学史研究』（ミネルヴァ書房）であった⁶⁾

本年のゼミ1には、光田、中野太郎（経済研究部）、中山、西川雄二（ゼミ連）、松浦、黒田、渡辺らが入った。女子学生が3名も入って、入江先生は「タマゲ」ている⁷⁾ゼミ1は前年度と同様にマーシャルの『経済学原理』（おそらく原書）を読み、また、サブゼミとして3班（古典班、マル経班、近経班）に分け指導した。西川、松浦、真鍋らの古典班はスミスの価値論について研究し

6) 『1973年教授要目』

7) 入江奨「74年の松山商大」『つくし』第6号、1974年3月20日、2頁。

ている⁸⁾。

ゼミ2もマーシャルの『経済学原理』（おそらく原書）の輪読を続け、サブゼミも続けている⁹⁾。

そして、ゼミ活動として、本年、本学で開催の第13回中四ゼミや第20回全日ゼミ（インゼミ、東北大）に取り組んだ。

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

さて、本年度は、八木学長・理事長ら大学当局が前年4月末「新学部設置委員会」を設け検討し続けてきた新学部構想が具体化する。設置委員会では当初社会学部とされていたが、人文・社会系の学問、とくに国際文化の研究を中軸とし語学教育に力を入れることとなり、人文学部とし、学科は英語英文学科と社会学部の2学科に変更し、募集定員は各50名で、1974年度から開設することとなった¹⁰⁾。

そして、5月28日の教授会でこの人文学部開設が承認された。

ただ、この人文学部の設置に関して、学内の雰囲気はかならずしも賛成でなかったが、経済学部を賛成の方向にもっていかれたのは入江先生であったと、比嘉清松元松山大学学長が入江先生の功績を高く評価し、指摘している¹¹⁾。

そして、6月29日、八木理事長ら大学当局は文部省に『松山商科大学人文学部設置認可申請書』を提出した¹²⁾。

本年、第13回中四ゼミナール大会が本学で開かれたが、詳細不明である。

また、第20回全日ゼミ（インゼミ）が東北大学で開かれ、本学からも数十名が参加した。そしてこの大会で次回の大会は松山商大で開催することが論議され、ゼミ連委員長の加地二郎（入江ゼミ）から相談を受けた入江先生は、とても引き受ける能力がないと消極的ないし反対であったが、3年生以下のゼミ

8) 「入江ゼミ I 部古典派研究会」『つくし』第6号、1974年3月20日、32～34頁。

9) 『1973年教授要目』

10) 「愛媛新聞」1973年5月24日。

11) 比嘉清松「入江先生のご受賞を祝う」『つくし』第25号、2000年7月、2～3頁。

12) 『松山商科大学人文学部設置認可申請書』より。

連活動家の熱情と愛学心により大会を引き受けることになった、という¹³⁾

11月23日、創立50周年記念式典が挙行された。八木亀太郎学長は式辞において、「開かれた大学」の理念を実践し、地方大学としての真価を創造したい、また、世界市民育成の場たる国際色豊かな新しい学部を増設したいと述べた¹⁴⁾

創立50周年記念事業が終わった直後の11月28日、八木理事長ら理事会は「松山商科大学大学院（博士課程）設置協議書」を文部省に提出した。経済学研究科博士課程の申請で、入学定員は4名、修業年限は3年、1974年4月開設、であった。入江先生は経済学史特殊研究、同演習の担当であった¹⁵⁾

12月1日、松山商科大学『創立50周年記念論文集』が刊行された。入江先生はこの記念論文集に「『国富論』における有効需要論覚書」を執筆した。この論文について、後に入江先生は「『自然価格と市場価格』の論理構造にメスを加え、その有効需要論の特殊性を検討している。自然価格概念が単なる価格次元に属するというよりも、『完全自由競争下における再生産価格』という性格を強くもたされている点、需給論－価格論の関連は市場価格論についてのみ見い出される点に注目し、有効需要概念が『購買力を伴う需要』ではなく、『供給を有効ならしめる需要』に力点をおいたものであるとの意義を考えた¹⁶⁾と記している。

12月、入江先生は、『松山商大論集』第24巻第5号に、昨年11月12日に本学で行なわれた、経済学史学会第36回大会のリカードウに関する3本の報告と討論の記録を「リカアドウ研究－経済学史学会第36回大会において」として掲載している¹⁷⁾

13) 入江奨「学園の新たな活力を待ち受ける心」『学園報』第28号、1974年12月1日。

同「学生の自主的研究活動の動向の一齣」250頁。同「インゼミ報告」『温山会報』第18号、1975年8月。

14) 『五十年史』366～369頁。『六十年史（資料編）』304～306頁。

15) 国立公文書館『松山商科大学大学院（博士課程）設置協議申請書』より。

16) 「松山商科大学大学院（博士課程）設置協議書」の入江先生の研究概要（1973年11月28日）より。

12月1日の『学園報』第24号（入試特集号）に入江経済学部長は「真理探求と実践の礎石づくり」と題した挨拶文を寄せた。その大要は次の如くであった。

「人生のなかで18歳から21歳は最もエネルギッシュな時期です。そのエネルギーを何に注ぐか、真剣に考えねばなりません。大学進学の意味を充分に考え、その役割、意義を自覚している青年を、私達は待ち望んでいます。自覚的主体的に学ぶ意欲に満ちた青年のために、私たちは共に研鑽する場を準備しています。

諸君の先輩の大部分は自覚的主体的に学んでいます。一年から四年まで。特に三、四年は個別指導（演習）を中心に研鑽が進められ、四年次生は様々なテーマで四年間の成果を卒業論文にまとめる作業に入っています。そういう状況の中で、大学が、学部が真理探求の場であることを自然に確認しています。（中略）

総じて私達が志しているのは、経済社会のどんな領域においても率先して指導的創造的に活動し得る素地をつくり上げることです。真理探求と実践のエネルギーこそがその素地の内容となるものです」¹⁸⁾

1974（昭和49）年1月10日、文部省より人文学部設置の認可がおりた。そして、同日、経済学部の伊藤恒夫教授が人文学部長事務取扱に就任した¹⁹⁾

2月17日、1974年度の入試が行なわれた。経済学部の募集人員は350名（文部省定員は250名）、経済学部の志願者は1,648名であった。合格発表は2月25日で経済学部は943名を発表した。

17) 入江奨「リカアドウ研究－経済学史学会第36回大会において」『松山商大論集』第4巻第5号、1973年12月。

18) 入江奨「真理探求と実践の礎石づくり」『学園報』第24号（入試特集号）、1973年12月1日。

19) 『六十年史（資料編）』70、127頁。

新設の人文学部（英語英米文学科，社会学科）の入試は2月27日実施された。募集人員は英語英米60名，社会60名（文部省定員は各学科とも50名）で，志願者は英語英米が300名，社会が604名であった。合格発表は3月5日で英語英米200名，社会206名を発表した²⁰⁾

さて，八木亀太郎学長は，1974年3月末で定年退職の年（65歳）にあたるため，退任することを決意した（本来の任期は，1974年12月31日まで）。その結果，学長選考規程により推薦委員会が設けられ，そこで，経済学部の太田明二教授（64歳）1人が推薦され，1974年2月，学長選挙の結果，太田明二教授が当選した。

3月20日，第23回卒業式が行なわれ，経済学部394名が卒業した。大学院経済学研究科修士課程は初めての修了生3名を出した²¹⁾ 入江先生指導生の森貞俊二も修士課程を修了した。入江ゼミでは，浅沼，大野，加地四郎（ゼミ連委員長），杉脇，能田，西岡ら20名が卒業した。

3月25日，大学院経済学研究科修士課程の入試が行なわれ，定員10名に対し，志願者は3人で，2名が合格した²²⁾

3月28日，大学院経済学研究科博士課程の設置認可が文部省により認められた（4月1日開設）。

2) 1974 (昭和49) 年度

入江先生経済学部長2年目，50歳～51歳にかけての時期である。学校法人の評議員を務めている。

4月1日，太田明二教授が第5代松山商科大学学長・理事長に就任した。

本年度の特筆すべきことは，人文学部が新設されたこと，ならびに大学院経済学研究科博士課程が増設されたことである。初代人文学部長には伊藤恒夫が

20) 松山商科大学『昭和49年度入学試験要項』、『六十年史（資料編）』174頁。

21) 『六十年史（資料編）』141頁。

22) 『昭和49年度松山商科大学大学院修士課程学生募集要項』、『六十年史（資料編）』161頁。

就任した（1974年4月1日～1976年12月31日）。大学院経済学研究科（修士課程、そして本年度増設の博士課程）の科長には、学長に就任した太田明二に代って、新しく望月清人が就任した（1974年4月1日～1978年3月31日）¹⁾

4月1日、入江経済学部長は『学園報』第25号（新入生歓迎号）に「自主的な学問の途へ」と題した歓迎の辞を載せている。その大要は次の通りで、入江先生がいかに研究の自由、学問の自由を大切にして、学生に対し、自主的に学問することを望んでいるかがわかる。

「私たちは常々、研究の自由、学問の自由という言葉を大事にしています。研究の方向や遣り方など、すべて研究者の自由にまかすべきだということです。権威による強制を拒否するということです。

この在り方は、教室における講義などにも当然に反映します。テキストのない講義も多いことでしょう。テキストが指定されていても、それに即応しないでおこなわれる講義、そのテキストに批判を加えながらおこなわれる講義も多いことでしょう。

そういう時には、勿論、学生諸君がその講義で示される見解に批判を加えることも十分に予想されています。むしろ、それを期待していると言った方がよいかも知れません。（中略）

聞いたことを記憶することは、それほど難しくはありません。けれども、思考し疑問を自覚し、その疑問を一定の形にまとめあげることは、大変な努力を要することです。一定水準以上の素養と訓練が必要な仕事です。諸君のこれからの仕事は、その素養を修得し訓練することです。

この仕事は、当然のことですが、教室だけでは、とても、まともにはできません。数多くの読書が必要ですし、友人との議論が必要です。これをやっていくことを、私は、自主的な学問の途と言っているのです。（中略）

1) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

クラブ活動をやっている、そこには研究の途があります。自主的な学問の途があります。思索する人間。思索と実践を結合する人間。どんな領域にでも、どんな業種にでも、そのような人間が求められています。思索する訓練、思索と実践を結合する訓練、これが多様におこなわれる場が大学です。

諸君の大学生活が、このようなものとして、真に有意義なものであることを念願しています。その途を開拓するかしないか、人生のなかで最もみのり豊かな時期と言われる青春の、これからの四年を、生かすかどうか、諸君の自主的な主体的な生活によって決まります。諸君の奮起を心から念じています。1974, 3, 18²⁾

4月初め、午前10時より体育館において、入学式が挙行され、経済学部は455名、経済学研究科修士課程は2名が入学した。院生は伊達、神森ゼミを志望し、入江ゼミの志望者はいなかった。新設の博士課程の入学者はいなかった³⁾

本年の新しい教員として、経済学部には鈴木茂（哲学、倫理学）、宍戸邦彦（経済統計論）、岩林彪（ロシア語、経済学）らが講師として採用された。

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様、基礎教育科目のマルクス経済学（4単位）、一般演習（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、そして短大の経済学Ⅰ（2単位）であった。大学院では、修士2年の芳野俊郎を指導している。

マルクス経済学の教授要目は前年とほぼ同様で、マルクス経済学の研究方法、価値法則、剰余価値生産の法則、資本蓄積の法則、資本の流通過程、生産価格法則、資本蓄積・競争のなかでの金融資本の形成、資本制生産の基本矛盾について、フリーノート方式で講義している。なお、主たる参考文献も前年と同様、

2) 『学園報』第25号（新入生歓迎号）、1974年4月1日。

3) 入学者数は『六十年史（資料編）』174、161頁。

金子ハルオ・林直道『経済学（上・下）』新日本出版社であった。

経済学史の教授要目も前年とほぼ同様であるが、講義内容を次のように要約している。

「古典学派の生成・発展・転化、またその転化の方向のなかでのマルクス経済学の生成・発展、そして限界学派の生成・発展にメスをいれる講義をおこなう。原始蓄積期の諸理論の形成過程（重商主義、重農学派、貨幣要因に視点をおいた経済理論の体系化の動向）が、古典学派の生成という形でとらえられ、道德哲学の形成と国富論体系の自立化として A. Smith 経済学がとらえられ、そこで展開された資本制蓄積の体系への理論的志向がやがて資本制蓄積体系への内部矛盾の分析へと進展していかざるをえなかった経過が、古典学派の発展過程としてとらえられる。次に登場する『相つぐ恐慌とその激しさの増加』のなかで経済学は階級的に分化し、それぞれの路線で展開されることになる。この経過が、マルクス経済学の生成・発展と限界分析の生成・発展という形で整理されている。この整理にもれた動向として、歴史学派の展開、経済社会論の動向なども、余裕があれば、取りあげられる」。そして、教科書は経済学史学会西南部会編の『経済学史研究』『近代経済学史研究』であった⁴⁾

本年のゼミ1には、秋山（経済研究部）、岡田、亀井嘉朗、木田、喜井、神山、下津、高岡、田口、武村、原田、中矢、松永、松永、白川らが入った（女子学生が7名）。

ゼミ1のテキストは本年度もマーシャルの『経済学原理』（おそらく原書）を輪読している。また、本年度もサブゼミとして古典学派、近経、マル経、現状分析班に分けて個別指導している。

4) 『1974年教授要目』

ゼミ2（松浦らの学年）のテキストは、昨年度からの続きとしてマーシャルの『経済学原理』（おそらく原書）を読んでいる⁵⁾

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

本年度、11月に本学で第21回全日ゼミ（インゼミ）が開かれる。それに向けて入江先生はゼミ連顧問として、ゼミ連を支援した。インゼミに向けて、全学的に実行委員会をつくり（委員長は佐藤伸、会計学研究部、神森ゼミ）、入江ゼミからもゼミ2（4年生）の中野太郎、中山高志、西川雄二の3名が参画した⁶⁾

そして、入江ゼミ3年生のサブゼミグループがインゼミに向かって発表の準備を行なった⁷⁾

また、本年度は学費値上げを巡って、大学当局と学生側が激しく対立した。入江ゼミ生もインゼミ準備と学費値上げ反対で多忙であったようだ⁸⁾

5月8日、太田明二理事長ら大学当局は、石油危機に伴う物価上昇により、本年度の学費の特別徴収並びに来年度の授業料値上げを決め、学友会ならびに新聞学会に説明した。その内容は次の通りである。

- ①在校生について特別徴収金として一律3万円を徴収する。そのため2年次生の学費として、授業料8万円、維持費3万円、施設拡充費1万円、計12万円を15万円とする。
- ②来年度より新入生の学費として、入学金を3万円から6万円に引き上げる。また学費として、授業料12万円、維持費を5万円、施設拡充費2

5) 『1974年教授要目』。

6) 中野太郎（1975年3月卒）「インターからのレポート」『つくし』第7号、1975年3月、23頁。

7) 喜井敏彦（1976年3月卒）「入江ゼミに入って」『つくし』第7号、1975年、3月、23頁。木田憲児（1976年3月卒）「『ゼミ』について思うこと」『つくし』第7号、1975年3月、24頁。金子博美「中年女の独り言」『つくし』第27号、2003年10月、12頁。

8) 田口敬英（1976年3月卒）「商大・学費値上げの不当性」『つくし』第7号、1975年、26頁。

万円、計19万円とする。合計9万円の大幅値上であった。

- ③1976年度より人事院のベースアップ分に新入生の学費をスライドさせる。

在校生への異例の特別徴収であり、また、来年度の新生へへの大幅な学費値上げであり、学生が反発した。

5月9日、学友会総務主催の学費値上げ反対集会在が100名程の参加で開かれた。

6月12日、学費改定反対の臨時学生大会が開かれ、白紙撤回要求、スト権確立と学費値上げ阻止闘争本部が結成され、6月19日に全学交渉が行なわれた。しかし、議論は平行線であった。20日～22日、授業放棄が行なわれた。

6月23日、学生の反発にあい、太田理事長ら大学側は修正案を提起した。それは、①在学生の値上げを半減する(1.5万円)、②スライド制を撤廃する、というものであった。

在学生への修正案の効果はあった。27日、学生大会において当初の白紙撤回要求が否定され、闘争本部が解散し、運動は終息した⁹⁾

7月の夏休み、入江ゼミではインゼミ大会に向けて夏合宿をしている¹⁰⁾

11月22日から25日の4日間にわたり、第21回全日本学生経済ゼミナール大会(インゼミ)がわが松山商大ではじめて開かれた。1日目は一般討論会が「地域開発は如何にあるべきかー日本経済の動態との関連においてー」というテーマで行なわれ、約200名が参加した。2日目は部門別自由テーマ討論会と部門別共通討論会が行なわれ、2,400名が参加した。3日目は部門別共通討論会が行なわれ、2,000名が参加した。4日目は記念講演会が行なわれ、400名

9) 『六十年史(資料編)』71頁。『松山商大新聞』第188号、1975年1月10日、第189号、1975年1月10日。

10) 木田憲児(1976年3月卒)『「ゼミ」について思うこと』『つくし』第7号、1975年3月、24頁。

が参加した。このインゼミには全国から51の大学、307ゼミが発表し、3,000名を超える参加者であった。本学からはのべ22ゼミが発表、のべ20ゼミが議長団の任にあたった。参加人員は発表者として220名余、講演参加者などを含め約700名が参加した¹¹⁾

入江ゼミは、ゼミ1のサブゼミが経済学史、マル経原論、ジュニア近経部門に参加し発表した。ゼミ2のサブゼミは経済学史、ジュニア近経、マル経の各議長団を担当した¹²⁾

このインゼミに参加した3年生の原田秀男（1976年3月卒）の思い出を引用しておこう。

「私は古典班にはいました。古典班は五人。ゼミの中で一番小さな班でした。そんな私も勉強しなければいけない機会が巡ってきました。『西日本学生ゼミナール大会』でした（川東注：全日ゼミの間違い）。先生に参加するように言われました。テーマは正確に覚えていませんが、“労働価値説”にかかわることだったとおもいます。私がスミス、岡田さん（現在金子さん）がリカード、秋山さん（現在中野さん）がマルクスを分担して原稿を作成し、大会の二、三日前に先生に見ていただきました。『君たち、こんな内容で参加するのかね。議論にはならないよ、この内容では』と手厳しい一言でした。特訓で演習を受けましたが、大会当日、先生が言われたとおり、参加するというよりもオブザーバーといった状態で惨憺たる結果でした。然しその後の私の人生において、その時学んだスミスの投下労働価値説と支配労働価値説は、商品を製造・販売にすることに携わる者として客観的視点から、少なからずそのコンセプトに影響を与え続けて

11) 入江奨「インゼミ報告」『温山会報』第18号、1975年8月。入江奨「学園の新たな活力を待ち受ける心」『学園報』第28号（入試特集号）1974年12月1日。同「学生の自主的研究活動の動向の一齣」より。

12) 中野太郎「インターからのレポート」『つくし』第7号、1975年3月、33頁。

おります」¹³⁾

本学でのインゼミ大会の成功、それは、ゼミ連の努力、佐藤伸（会計学研究部、神森ゼミ）を委員長とする松山商大大会実行委員会の不撓の努力の賜であった。また、ゼミ連顧問の入江先生の指導も大きかったと言えよう。

なお、第14回中四ゼミも開かれたが、その詳細は不明である。

12月1日、『学園報』第28号（入試特集号）で、入江経済学部長は「学園の新たな活力を待ち受ける心」と題した挨拶文を寄せた。その大要は次の如くで、インゼミ大会を紹介しながら入江先生の学生の自主的研究活動への期待、私学への国庫助成をもとめる運動への熱意が感じられる文章であった。

「いま、四年次生は、大部分の者が就職先も決まり、卒業後の活動について思いを馳せながら、卒業論文の作成に追われています。ゼミナール連絡協議会に属する者を中心にした全日ゼミ実行委員会のメンバーは、松山商科大学で、というよりも、中国四国ブロックで、初めて開催される『第二十一回日本学生経済ゼミナール松山商科大学大会』の日を目前に控えて、全国五十余の大学から集う報告者討論者約二千六百名の学生の受け入れ準備に、三年次生以下のメンバーとともに、寸刻を惜んで奔走しています。三年次生（専門演習第一部生）を中心にして、四年次ゼミ生や一年次二年次の研究会所属学生、約三百名は、二十余の部門グループにわかれて、全国から集う学生諸君と、日ごろの研究成果を交流することを目指して、報告の準備、討論の準備に、集中的なグループ討議を進めています。（中略）

昨年の「東北大学大会」にも本学から数十名の学生が参加し、理事校としてその運営にも参画しました。その席で、今回は中国四国ブロックで従って松山商大で大会を開くという問題が論議され、相談された私は、消

13) 原田秀男「入江先生への感謝の思い出」『つくし』第29号、2006年1月、29頁。

極的というよりも反対でした。とても能力があるまいという理由で。その交渉の責任者であった当時の四年次生（現卒業生）も、後輩の苦勞を考へて消極的であつたようですが、これまでの全日ゼミでの本学学生の活躍、西日ゼミ、中国四国ゼミでの本学の中心的役割の評価などを理由とした全国的規模での説得、その期待に応えようとする当時の三年次生以下のゼミ連活動家の熱情と愛学心が、結局、「松山商科大学大会」を決定させました。爾來約十ヶ月。学校当局の物心両面の支持をえて、学費問題その他のさまざまな困難を乗り越えつつ続けられたゼミ連を中心にした実行委員（全員が勿論学生）の不撓の努力が、専門演習の多くの学生をインゼミに向けて結集させることになったのです。

私は、現在の本学の状況に決して満足してはいません。納付金は国立大学の何倍も高いし、多くの家庭の負担能力から見ても危機的に高いのではないかと思います。教員一人当りの学生数も国立大学に比べて遥かに多い。そして、教室の数や規模、グラウンドや敷地の規模、研究施設の内容も、理想とするものに比べて遥かに劣っています。また、現在の学生気質として見逃すには余りにも問題のある多くの在学生の生活態度。アルバイトをすることが本職のような学生、サークルに結集しようとする気の全くない多くの学生、学園生活への確乎とした目的意識をもたない学生、大学に学ぶ社会的意義と社会的任務を自覚しない学生、図書館に近づこうとしない学生、などなど。数えあげれば無数の弱点が本学には存在します。

けれども、私が、そのような弱点だらけの本学に、多くの救いを見出していることも確かです。そのことを通して本学の将来に私は望みを託しています。日本の大学の現状がどうであろうが、日本の大学に大きな期待を有っているのと同じように。

このほど国庫助成を求める全国私大教授会連合が結成されましたが、その推進に当たって本学の教授会は決定的な役割を果たしましたし、今後もその運動の不可欠な推進力になることは間違いありません。しかも、本学は

どに教授会の足並みがそろい、理事会の強力な支援がある例は、百十加盟大学のなかでも稀有であることを痛感しています。これは本学のすべての教員が本学の弱点を自分たちの努力で解決しようとしている熱意の現われです。

教育と研究の板ばさみになりながらも、専門演習一部（三年次）二部（四年次）そして一般演習（一、二年次）と、それぞれについて、ほぼ一人当たり二十人ぐらいの学生を担当し、時には合宿し、時には共に旅に出て、個々の学生と接触し、卒業論文のまとめを強力に支援している教員。これほどに頼りになる要因はありません。

先に述べたインゼミ。中国四国の経済関係の国公立の大学のなかで、これをやり切る学生と教員を待ち続けている大学の筆頭が松山商科大学であることは、今や衆目の一致するところとなりました。この核が存続する限り、私は松山商大に無限の期待を寄せることができます（中略）。

受験生諸君が何をいま考え望んでおられるか、私には判りません。けれども、諸君に望みたいことはあります。据え膳を喰う人間にはなってほしくないということです。大学生活を経験するということは諸君の権利である。同時にそのことによって諸君は大きな任務を担うことにもなる。「創造」という任務を。（四九、一一、一六）¹⁴⁾

また、入江先生は『つくし』第7号（1975年3月）に巻頭言「75年の私立大学と松山商大」を載せているので、その大要を紹介しておこう。

「学園からのレポートですから、研究成果を報告するのが最も幸せですが、殆どみるべきものがありません。何とはなしに雑用で過ぎてしまいました。任期もあと2ヶ月を残すのみですが、やりかけの仕事を放棄するの

14) 『学園報』第28号（入試特集号）、1974年12月1日。

は無責任とおもわれ、運動をしていませんのでどうなりますことやら。じっと幸運をまち、最後のおつとめ、人事の遂行、充実への努力、カリキュラム改善の大筋をつけること、入試改善、国庫助成運動のルールを確実なものにすること等が主題です。

学会のことについて。ケインズやジェボンズ、メンガー、ワルラス、マーシャルなどを学ぶとき、頭を離れないのが労働価値論のことです。1週間前の小倉で開かれた経済学史学会西南部会で、『古典学派の現代的意義』が共通テーマとして取り上げられました。その中で私が持ち続けている問題が依然として学会の未解決問題であること、研究が淀んでいることを痛感しました。

学内について、古典班、マル経班、近経班、現状分析班の4サブゼミに分かれた総合的ゼミ方式は、私の意図する成果を挙げていませんが、今年もその方式を持続することにしました。

マスプロの弊害は大きくなる一方です。学生と手を結ぼうとしても離れる一方です。悩みの種です。

学費の大幅値上げがやってきます。大幅値上げですが、全国的には低い所ですが、全くタマツタモノではありません。国庫助成を大幅化する以外に解決の途はありません。昨年5月以来教授会のなかに国庫助成促進学内委員会をつくり、ゼミOBの山口君を先頭に頑張っています。2月3日の全国教授会連合代表者集会には私が出席することになりました。

学費値上げの悩み、私学助成運動の追求に心を痛め、学園民主化の途を探り、カリキュラム改善の検討に精力をとられた1年でした。道の遠く険しいことを痛感しているところです（1975年1月31日）¹⁵⁾

1975（昭和50）年2月16日、1975年度の入試が行なわれた。経済学部の募

15) 入江奨「75年の私立大学と松山商大」『つくし』第7号、1975年。

集人員は350名(文部省定員は250名)で、経済学部の志願者は1,947名であった。合格発表は2月24日で、経済学部は959名を発表した。

なお、学費は1975年度入学生から大幅に値上げされた。入学金は6万円(前年度3万円)、授業料は12万円(前年度8万円)、維持費は5万円(前年度3万円)、施設拡充費は2万円(前年度2万円、2年次以降も2万円)、その他が1万2,250円(前年度8,450円)で、合計26万2,250円で、前年に比し、9万3,800円の値上げであった¹⁶⁾

2月、入江経済学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、入江先生が再任された。

3月下旬、第24回卒業式が行なわれ、経済学部は413名が卒業し、経済学研究科修士課程は4名(芳野俊郎)が修了した¹⁷⁾。なお、入江先生指導生の芳野俊郎は、大阪府立高校教員をへて、後、立命館大学院経営学研究科博士課程にすすむ。入江ゼミでは光田、中野太郎(経済研究部)、中山、西川雄二(ゼミ連)、松浦、黒田、渡辺ら15名が卒業した。

『つくし』第7号に、本年の卒業論文名が出ているので、掲げておこう¹⁸⁾。入江先生が幅広く指導していることがわかる。

古典班「アダム・スミスの価値尺度論」「リカード経済学における利潤に及ぼす蓄積の影響について」「アンシャン・レジーム下の農業改革について」

マル経班「マルクス主義と労働疎外論」「貨幣材料の再生産について」「価値論研究」「窮乏化論」「マルクスの恐慌をめぐるアプローチ」

近経班「J・S・ミルにみる女性解放論」「公共経済学への期待」「ケインズ一般理論における財政政策とニューディールにおける財政政策について」

16) 松山商科大学『昭和50年度入学試験要項』、『六十年史(資料編)』174頁。

17) 『六十年史(資料編)』141, 161頁。

18) 「卒論から」『つくし』第7号, 1975年3月。

て」「流動性選好説の意味」「ケインズ経済学における貨幣理論」「消費関数 その安定性についての考察」

修士課程を修了した芳野俊郎の思い出「入江奨先生への深謝！」を紹介しよう。

「修士課程演習担当の入江先生は“大きな船”でした。東京の日ソ学院で一ヶ月のロシア語学習、京都府立資料館での三週間の国会議事録資料漁りなど全く自由に行動させて頂きました。そのころの地域社会では、“サラ金・教育現場での生徒住所秘匿”問題、そして“いじめ”問題が激化しはじめていました。全国総合開発計画実施が“新たな地域開発問題”を再発させる局面でもありました。そこで、修士論文のテーマは、岩田先生からご紹介を受けた“基礎研”の方のアドバイスも受け、それら全総の母法である『国土総合開発法』（1950年制定）の背景と狙いを、国会議事録を第一資料として分析することにしました。修論審査ののち、副査であった山口卓志先生からは“原稿を一万字に再要約を”との指示を受け、なんと雑誌『都市問題』（1977年7月）に「戦後の『地域開発』思想の特質－国土総合開発法の位置づけをめぐる」として掲載される幸運を手にしました。大阪府立高校教員一四年目・四三才にて大学院博士課程の受験準備を勧められた時点でのベースになったのがこの雑誌掲載論文と日ソ学院露語研修でした。

こうして入江先生から学ばれた岩田裕先生には大阪での高校教員につながる途を、山口卓志先生には博士課程進学につながる論文のご支援を受けることになったのです。入江先生、深謝です。いま、京都のとある研究会でアダム・スミス研究ゼミに参加し、“政治経済学の目的・意義”および“偉大なる道徳倫理社会学者”の現代読みに徹々たる挑戦をしています。“門をたたき続ける”入江精神をまなび続けます（2019年11月12日）¹⁹⁾

3月24日、大学院経済学研究科修士課程の入試（第2次）が行なわれた。
13名が受験し、5名（渡辺利文ら）が合格した²⁰⁾

19) 芳野俊郎「入江奨先生深謝！」『温山会報』第62号、2020年2月。

20) 『昭和50年度松山商科大学大学院学生募集要領』、『六十年史（資料編）』161頁。